

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載 ◆ 第17回 / 彫刻家ブランショと朝香宮 — パリの思い出を胸に(その2)

Residence of Prince Asaka 1933—



図1

第一次世界大戦の勃発に際して自ら志願したブランショは、まず得意の語学力を活かし、軍事病院で通訳として働きました。現在、フランス空軍歴史資料館に保管されている資料によれば、彼は母国語のフランス語に加え、英語とイタリア語にも堪能、ドイツ語とアラブ語でも会話ができたということです。

身長180cm、ブロンド色の髪にブルーの瞳を持ち、フェンシングや乗馬を愛好していたブランショには、夫人と娘一人の家族がありました。この時すでに46歳、彫刻家として活躍していた彼がなぜ志願したのか、その理由は定かではありません。あるいは持ち前の愛国心が、かつて軍人として名を馳せた祖父や父親と同じ道を歩ませたのでしょうか(図1)。

ブランショは、プロフィールの欄に「職業は彫刻家。素早くデッサンができ、地形・形勢図を迅速に作成することができる」と自らをアピールし、もともとは航空隊への配属を希望していたようです。1916年、念願かなってフランス空軍航空隊に入隊し、空からの偵察任務で活躍した彼は、18年戦功

十字勲章を贈られ少尉に任官、復員した19年には、レジオン・ドヌール勲章(勲5等シュバリエ章)を授与されました。軍人としてのブランショは、たいへん勇敢であったと伝えられています。

1924年にフランスで発行された紳士録を繰ると、パリ16区マラコフ街88番地のアパートマンに居を構えていた朝香宮夫妻の情報とともに、当時は空軍予備役として中尉の位にあり、夫妻と同じ16区のテオフィュー・ゴーティエ街66番地に暮らしていたブランショの情報が、佩用を許された数々の勲章に彩られて掲載されています。

輝かしい軍功とは裏腹に、戦争から戻ったブランショを待ち受けていたのは、厳しい現実でした。1920年代以降、彫刻家としての仕事は激減し、彼は生活するために作品鑑定の仕事や美術講師、書籍の執筆など何でも厭わず引受けました(図2)。また、職を求めて自らを売り込む努力も怠りませんでしたが、返事はどれも彼の期待に添うものではありませんでした。出会った経緯は今なお謎のままですが、允子妃殿下に水彩画を教授していたのもこの頃のことです(図3)。

決して豊かな生活を送っていたとは言えないブランショが、朝香宮邸の内装を手がけた装飾美

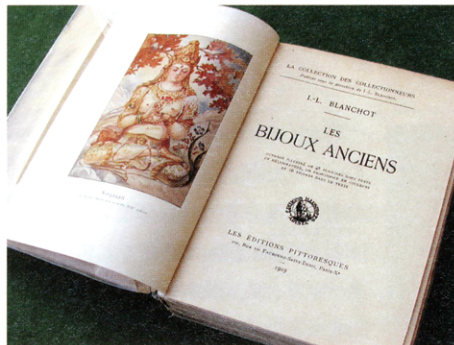


図2

術家アンリ・ラパンと、アール・デコ博覧会やセーブル製陶所など、様々な場面において接点を持っていたことが最近明らかとなりました。この事実は、朝香宮邸の内装がラパンに委ねられることとなった経緯の一端を、臆気ながら物語ってくれます。(次号へ続く/牟田)



図3

図1. ブランショ自身が撮影したと思われるアトリエ内の様子。完成した作品の石膏型を記録したのでしょう。画面左隅にブランショが立っていますが、多重露光によって彼の姿がもうひとつ写り込んだ、不思議な写真です。笑みを湛えた表情には、まだ若い頃の面影が残っています。

撮影年不詳
フランス国立公文書館蔵

図2. ブランショの著書『ビジュ・アンジャン(古代の宝飾品)』。1929年にパリで発行された本書は、彼が監修した美術叢書全6冊のうちの1冊でした。この頃、ブランショはフランス語普及のための民間団体アリアンス・フランセーズで、語学の指導にあたっていたようです。

個人蔵

図3. 1923年8月14日付のブランショ水彩画レッスン料受領証。ブランショは、月1,000フランで允子妃殿下に絵画の指導を行っていました。レッスンが始まったばかりと思われるこの日、妃殿下はパリ市内の画材店で水彩画の道具一式を購入しています。

東京都庭園美術館蔵